特100
121

Essence Series

オイツンヌンダ

牲犠

加藤朝鳥編

始

特100
121

帝國圖書館藏

エッセンスセリース

9

大正
3. 7. 23
内交

エッセンス叢書發刊の趣旨

近頃一體に縮刷と云ふことが流行して參りました。結構な事でムいます。從前ならば大判で五册も十册もあつて、廣からぬ本棚に大きな場所を取り、またそれに相應するだけの高い價を拂はねばならなかつたものが、ちよいとポケットにも入れて歩けるやうになり、價も隨つて格好になつて參りました。

結構は結構ですが、これだけではまだ、今日のやうに忙しい生活をしてゐる人々の、限りなき讀書慾を滿足さす上に十分であるとは申されません。

なぜと云つて、今日の所謂縮刷は、容積と價格とだけの縮少であつて、實質的內容の上の縮少でない。原版の內容が十萬語あるものならば、縮刷版の內容もやはり十萬語はある。原版を通讀するに十時間をかゝる者ならば、縮刷版を通讀するにも同じやうに十時間かゝる。否むしろ、文字が細かくなつて讀みにくい場合なぞ、十時間のものは十三時間十五時間もかゝるかも知れないのであります。

乃ち、縮刷の次ぎに來るべき要求は、當然この「內容の縮刷」でなければなりません。十萬語のものは一萬語乃至五千語にも書き縮めて、十時間かゝつた通讀を、一時間乃至半時間でも出來るやうにする。目の廻るほど忙しい人々へ、その人達の讀みたいと思ふ傑作名著を、純粹のエッセンスだけに煎じつめて供給する。これこそ、今日の一般讀書界が痛切に要求してゐる本當の縮刷ではありますまいか。

私共のこの「エッセンス叢書」は、何よりも先づこの要求に應じて計畫されたものでムいます。

ながながと効能を述べ立てるのも、お互に時間の浪費となりませう。この叢書が、如何に澤山の內容を煎じつめてゐるか、如何に高尙な思想を解り易く嚙み碎いてゐるか、如何に廉價にしかも體裁よく世界的の大著作を提供してゐるかは、その一册をでも御一瞥下すつた方には、直ぐに御分りになる事と信じます。

大正三年七月

青年學藝社同人

ダンヌンツイオ作

犧牲

加藤朝鳥

序

『犠牲』はダンヌンツィオの作品のうちで、最も結構の整つた藝術味の豊かな作品であることは、伊太利亞文學通で鳴つて居る英のウキダ氏を始めとして多くの批評家の一致して居る處である。恐らく誰も異議はあるまい。だが、歐洲においても日本と同様にそのポピラリチイの點で『死の勝利』に亞ぐものとされてしまつて居る。これには種々の原因もあらう。が特にここに掲ぐ可き理由としては、ダンヌンツィオの妖艶な筆致は、戀人の心を描くことが、家庭を描くよりも更に適して居る。またダンヌンツィオに對する一般讀書界の成心がさうなつて居るのである。ダンヌンツィオから哲學を聽かうとするものは最も愚劣である。が同時にその南國的な艶麗な濃厚から一つの歡樂を得やうとするのも正鴻から遠い見當だ。眞個の讀

書子が此の作者に求むべき處は、矢張り人道（ヒユマニチイ）に根ざした悲痛の叫びである。彼は情緒の奔放を以つて聞こえて居るが、決してその解放を企てた作者では無い。闇い盲目者である。彼は自分の居る處を一段の高所にもとめるやうな事はしないで、闇い盲目者の運命に即したまゝで奔放である。此の意味からすると明さの點においてメタリンクの足もとにも及ばぬ。けれども茲が彼の強烈に人間性を發揮する處であつて、彼の描くところが幻想的でありながら空靈とならず、豐艶でありながら官能的とならず、誇張的でありながら現實性を失はぬ所である。問題を呼び、又は永遠の謎を想ふ作者のかたはらに、茲に小鳥が樹の間に歌ふ樣な人間本來の聲もある。

近代の多くの作家はアポロとヂオニソスと戰場に中立の徽號をつけた觀戰者である。だが彼は、嘗つて支那の孔子がアポロの味方であつた樣に、ヂオニソス其のものであるかと思はせる程一方に即して居る。勿論彼は哲學を學んだ。けれどもその究める對當はヂオニソスに味方（みかた）して勝つべき戰術である。突貫である。加之も此の闘の聲は多く決死や敗北の叫び聲である。すくなくとも此の悲痛感は、近代人が彼に覺える共鳴でなくてはならぬ。

大正三年　七　月

加藤朝鳥　識

ダンヌンツィオ作

犠牲

加藤朝鳥

裁判官の前に出て「私――此のツリオ、ハミル――が此の手で殺人を犯した」と云ふ事が出來やうか。否。それは到底能はぬ。世界中、如何なる法廷も、此の私に宣告し得ないであらう。然し私は懺悔し、告白せずには居られない。

一

で私はそれに就いて語つて見ると

四月であつた、ラバヂオラの田舍別莊に實母を訪れ、復活祭の季節を樂しく暮さうと二人の娘と妻とを連れて行つたのは、妻のジュリアノと結婚してから七年

目の年であつた。

私は三年前矢張此處で復活祭を送つた事を思ひ出したそれは今と異つて、實に平和と感謝との、幸福に滿ちた歡喜の祭であつた。紫丁香花の高い馨に包まれた此の別莊の中には二番娘のナタリアの幼い可愛らしい姿と、私が罪を悔いて妻に對して優しくなつたのを心から喜こんだジウリアノの晴やかな笑ひと、而してそれを祝福する實母の喜びとで包まれてあつた。呼！　然し、此の三年の間の變りやうの酷たらしさよ。私は妻の親友の二人をも戀し、それのみか淫な女テレザの姿にまで心を迷はした。而してテレザの爲めにラツフォ伯と戀も爭つた。斯くして私の色に溺れ行く心はジウリアノと遠く隔れて行つた。

ジウリアノは斯うした苦痛を默つて堪へて居た。

妻は私が自分の犯しつつある罪惡を餘程小くして話すのを默つて聽いて居た。

妻は私を信じて何事も斷念めて居るらしかつた。私はそれをいい事にして放縱な生活のみを一向求めて居た。而して私は妻に向つて姦落な兄となり亡くなつた妹コスタンザの懷しい思ひ出が辿つて、其の愛慾を妻に求めやうとした。家の道具かなんぞのやうになつて行く妻を私は飽足らず思つた。斯う迄になつた夫婦の心をお互に悲しみもし呪ひもした、が遂には肉の抱合が唯一の一致だとも思ひ迷つた。

總の夢は去つた。呼！　此の荒むだ生を吾々は何時迄續ければならぬか!?　吾々は何とかして再び昔の華かな愛に甦らねばならぬと焦つたがそれは既う遲かつた。夫婦の心は餘りに寂寞であつた。

此の新生涯は既う夫婦ではなく兄妹であつた。妻は妹が兄に優しく事へるやうに私に接した。時たま交す接吻も、あはれ何の暖味もなく乾いて居た。妻は全く、

犠牲となつたのである。

私は情婦の許でよく妻からの親切な手紙を受け取つた、而して折々自分の妻に對する慘酷さを悔いても見たが、斯うした苦痛も妻にとつてはいい見せしめだと自ら理窟をつけたりした。

ジュリアノは或時劇藥にでも中つた樣に眞蒼になつて慄へて居た。私は其の夕暮の中に眼を大きく開いた妻の姿を見て急に恐ろしくなつた。妻は毒を呑んだのであるかまいか・・・

『助けて、ツリオ樣』

妻は身悶へして私の胸に斯う叫むだ。然し私の恐怖に襲はれた蒼ひ顏を見て何てもないと打ち消した。私は今自分が妻を刺し殺してもするやうな苦しさを覺えて、只々妻は煩悶の爲め毒藥を飲むだとばかり信じた。

『何故お前は毒を飲んだ』と云ふ言葉を妻は不思議に思つたらしい。

其後になつて判つたが妻は毒藥を飲むだのではなかつた。其れは極めて危險な病氣で、姙娠すれば妻の生命は無いと云ふ醫者の言葉もあつた、私には是れが非常な好都合となつた、此の時丁度實母と兄のフェデリコが田舍から羅馬に來た。實母はジュリアノをこの上なき良妻と可愛がつた。

私は妖魔の樣なテレザが暫く田舍へ行つたので漸く心が落ち着いて妻に對して愛情を注ぐ事が出來た。

妻は女らしい心から自分の身を醫者の手に任すのを拒むだ、而して氣狂しく私等の言葉に遮つた。

『貴郎は私を怖いとは思ひませんか、這麼醜い姿を。れ、眞當の御心を聽かして下さいまし』

と言ふかと思ふと藥の臭氣さへ氣にして見たり、苦しい心を一人で呟いて見たり、ジゥリアノは全く神經過敏となつてしまつた。

此の有樣を見た私は心から斯う叫むだ。「吁優しい哀れな妻よ、許せ、許せ、私は決して他の女を心から愛した事は無いお前許りを愛した。お前は私の最愛な者だ。昔の樂しかつた事を思ひ出して吳れ、ジゥリアノお前の病氣が治つたら又思ひ出のギラリラに行かう而して再び失くなつた幸福を取り返さう……」

然し私は妻の心を量り兼ねて口に出しては云はなかつた。

次の日も又次の日も毎日種々な心に迷はされた。而して美しい樂しい新生涯に入る事のみを夢見た。

『吁！　ギラリラに行く。彼處は私とジゥリアノとの蜜の樣な甘い想ひ出である。二人の子供をバチオラの叔母に預けて、二人は彼の樂しかつたギラリラに行

かう。此の腕に病後の妻を抱いて……而して今迄の厭な事を悉く忘れて二人は戀の中にひたつて……」

妻がクロロホルムの麻醉をかけられたのを見た時の私の苦しみ、其の苦悶に堪へ兼ねて其の室を出た。

私は次の室で妻の美しい肉體が鋭いナイフに貫かれるのを想像した。同時に自分の犯した罪が痛切に悔いられた。

私は無事に手術を受けて安らかに眠つて居る妻の病室に入つて行つた。

妻は其の日の黄昏時から急に熱が出て非常な苦痛を訴へたが、それでも次の日からは稍快く日增しに快方に向つた。私は妻に頻りに親切を盡して見たが矢張『兄』であつた。情婦の事さへ頻に思ひ出されるのであつた。

或る日實母が這入つて來てバチオラに行くのを薦めた、私は速座に贊成した、

其れを聽いて居た妻の嬉し相な顔――私は其の美しい無邪氣な有樣に恍惚とした。實母が出ると私は妻の手をとつて、

『ギラリラに行かうれ』

『はい……』

二人は斯うした樂しい夢を永久に見て居たいと希つた。

其の日は樂しい思ひを抱いて暮れる迄詩集を讀んで居た。醉はされるやうなインの數々私の指が導くまゝに妻は微笑を湛えて追つて行つた。

妻の枕の中や敷物の中に入れた蔦尾の根のゆかしい匂が二人を一層醉はしてまつた。

私は感極まつて妻の白い細い手首を把つて接吻した。

『何事も忘れてお呉れれ……』

何か妻が云はうとする刹那、實母が這入つて來てタリス夫人の訪問を知らせた。夫婦は何となく不快な目を見合はせた。私はタリス夫人が嫌いなので其の場をはづした。

室を出て階段の處で私は姉娘のマリアの手から手紙を受け取つた。それは田舍の情婦からの音信であつた。密會の日取と時間を知らせてよこした此の手紙に私は又も心を奪はれて了つた。

吁！　私の妻に對する今迄の心盡しは此の手紙で見事に破られて了つた。

私は街道に出て菓子や小説本を買つた。而して家に歸つて階段を登りかけると直ぐ妻の事を思ひ浮べた、私の慘酷な心を自ら責めて見た。今が今迄の妻の嬉し相に微笑して居た面影を思ひ浮べる。吁！　妻は全く私が改心したと思つて居るに違無い。

然し妻は私を眞實に信じて居て吳れるのか知らん。ギラリラに行くと云つた時の嬉し相な顏！　彼の霞へた唇、無邪氣な眸……什うして疑はれやう。然し私のポツケツトにあるテレザの手紙は私を悶搔かせるばかりだ。

病室に這入ると妻は嫋々した顏に血の色さへ見せて、

『ツリオ樣。何處へいらつして？』

『嫌なタリスが來たから逃げたのさ。』

と云つて何氣なく買つた菓子と小說本とを妻の前に出した。

ジウリアノは菓子を唇に乘せて居たが食べられないと云ふ醫師からの嚴禁に氣づいて

『今れお醫者樣がいらつして木曜日には床上げが出來ますつて。ツリオ樣。十日か二週間の中に旅行も出來ますわ』

妻は斯う云つて薔薇の樣に微笑むだ。

ジウリアノはギラリラに行く事より他何も思つて居ないらしい、私は其れを思ふとオドオドした。

妻は私の樣子のみ見乍ら若々しい美しい顏をして居た。

『去年私等が挿して置いた池の岸の柳は根づいて居ますでせうか。』

『ついて居ますよ。立派な木になつて居ます』

と母は云つた。

『まあ左樣。』

餘念もない話に妻は夢中になつて居た。斯うした妻を見ると私はテレザの意に從ふのがすまない氣がして來た。

實母がジウリアノに白葡萄酒を薦めると

『ツリオ様、想ひ出の白葡萄酒』

戀の酒！　私は

『懐しい酒だれ』と和した。

妻の顔は美しく熱して來た。

皆が去つた後で妻は私の頰に雅かにそつと接吻をした。

此の接吻。謹み深い妻の此の接吻に無言の意味が籠つて居た。此の刹那、妹ではなく妻であつた。私は過去の悲しい姿の妻の事さへ思ひ浮べて其の夜は永い間眠れなかつた。

翌日になると又心が變つた。戀しいテレザに對して違約する樣な無情な事は私には到底出來ないと思つた。二人の何者にも劣らぬ情熱は誰も知つて居る。木曜日の床上までに何とかして行かねばならぬと力んでも見る。がジウリアノの病室

を見舞つて歸つて來た時稍其決心が出來た、テレザの申込を拒絶すると云ふこと、然し私の心はそれに裏切りしてしまふ。

水曜日にテレザから電報が來た。私は遂に行く事に定めて了つた。●●行くと返電して了ふと心が落ち着いた。が私は流石妻の室へ這入り兼れたが、つい優しい妻の聲に思はず足を入れた。而して病氣だと偽つた。がジウリアノは決して疑ふやうな樣子がなかつた。私は妻に對して懺悔しやうと思つたが例の自分勝手が出て止めて了つた。而してジウリアノが私を見て頻りと心配して居るのをいい事にして私は其の優しい妻を涙で欺かうとした。故意と涙の頰を見せると妻は驚いて私の顔を抱いた。私は其の時、一其の手を逃れて室を出た。吁！　何たる此の心ぞ！

明日は妻の床上げの日である。樂しい其の日を實母は語つて居たが聽て出て行

つた。妻は又も先程の事を氣にして頻りに問ふたが私は何でも無いと唯涙を流して見せた。此の涙を妻は何と見るであらうか？　私の眞實の懺悔の涙と見て吳れるであらうか。

次の朝は照り輝いた樂しい日であつた。ジウリアノは私に、呼ぶ迄は這入つて來るなと云ふので私は次の室で待つて居た。

ジウリアノの聲に私は室に行くと妻は裾を長く曳いた美しいスラリとした姿で兩頰に笑を湛えて立つて居た。其のなよなよとした姿が今にも仆れやうとするので實母も私も手を伸べやうとすると。

『否、否、仆れやあしませんわ。獨りで肘掛椅子迄行つて見ますわ。』

妻は一足歩いたが急に苦痛を覺えて私の腕に仆れかかつた。私は力一杯に妻を抱き緊めた。妻は私の胸元で完爾と笑つた。

私は妻を扶けて心地よさ相な安樂椅子に腰をかけさせた。而して出來得るだけの親切を見せた。足の下や頭の邊に蒲團を置いたり、新らしい花の花瓶や新刊雜誌を持つて行つたりした。斯うした振舞に私は什うやら我れと我が情を欺くやうな氣持がせられてならなかつた。然し私の心は斯うした振舞を尙ほ强いた。

妻は幾度も感謝した。而して愛と、感謝と平和と夢に滿ちた兩腕をさし出した。其の仄りと美しい表情を湛えた妻の前に私は心の慓を禁ずる事が出來なかつた。

私の心の中では二人の力が纏繞つたのであつた。妻に對する此の慘酷と、例の我利主義とが私の心を雜ぜかへして了つた。

私は明日外出する。それを母と妻に今云つて置く必要がある。然し折角開いた愛情の花を又凋ませて了ふのではあるまいか。妻は冷かな犧牲となつて仆れて了ふのではあるまいか。

私は幾度も迷ひ悶へた。何とかジュリアノに穏に知らさうと苦むだ、が妻は將來の樂しさを夢見て喜こんで居る。私は斯うした姿を見乍ら自分の心が此の美しい姿から隔つて行くのを悲しんだ。

最後の時が來た。

『れ、ツリオ様、明日私が少し快かつたら露臺へ連れてつて下さいな。』

私は只一言

『明日は出る。』

吁！　妻の驚愕。私は今犠牲を殺すのだ。一太刀で呼吸の根が絶えるのだと凄い感じが犇と迫つた。

『フローレンスに行く。』

『エー』

妻は直ぐに悟つた。

『吁！　ジュリアノ！』私は只一言。妻を固く抱いた。蒼ざめて息づかひに絶え入るやうに瞼を塞いで、痙攣に慄えた。

罪悪！　何たる慘酷しさよ！

私は非常に酷い心で外に出た。

——家を出てから一週間、歸つて來た折の二三日。私は私の慘酷な鐵面皮を恥じた。

妻は只淋しく沈默して堪えて居た。而して二人の子供と母と兄も一緒にラ、パチオラに行つて了つた。私一人羅馬に殘つた。

其の日から私の生涯は暗黒破滅の境に入つた。テレザの毒々しい美に溺れて日増しに墮落して行つた。妻の顔を見ると只心が苛立つので口も利かず、顔を見る

事もしなかつた。一切妻の事には心を注が無くなつた。而して、妻の笑ひ聲でも聽くと矢鱈癇に觸つた。或の日の事次の室でジュリアノは樂し相に謳つて居る聲がしたので突然に私は其の室に侵入した。

『謳つて浮かれて居るんだな。』

妻は氣狂人にでも對する時のやうな同情を以て私の荒んだ顏を見て居た。

『何處かに行かうと化粧して居るんだらう？』

妻は只平然と『ハイ』と答へたばかり。私の心は唯まごついて居た。セントアルチンの夏(十一月の中頃)の光りは窓を流れ込んで、室には得ならぬ香氣が滿ちて居る。

私は今謳つて居たオルフイウスの歌が耳の底に殘つて居るので

『お前の謳つて居た歌は懷しい歌だね』

と卒直に云つた。而して何故其の歌を謳つて居るかと聞かうとしたが止めた。

『是れから何處ぞへお出かけると云ふ段取だな』

『ハイ。短衣を着て、帽子を冠ればいいのです』

と云ひながら仕度した。私は又、何處へ行く？ と聞き度かつたが默つて了つた。

ジュリアノの美しい崇高な神々しい姿！ 優しいうちにも犯すべからざる處のある此の淑女が何で妻としてふさわしからぬ事があらう。それだのに私は顧みもせぬ。人は私から隔れた此の女を默つて什うして捨てて置かう。妻は良人に捨てられた寂莫と恨みを以て其の純潔を私故に什うして保つて居やう。私は眞正面から妻に其の貞操を詰問して見やうかとさへ思つた。

妻の面衣の針を止めたり、短衣を手傳つたりしてやつたが、二人の眼は唯冷かに會ふのみであつた。妻は斯うした自分の振舞を不思議に思つて居るらしい。妻

は一寸出て來ますと云つて出て行つた。

私は疑惑の目で見送つて直ぐ寫字臺の上の手紙や書籍を見まはした。私は親展の手紙には故意と目を止めず、アルポリオの最近の小説『秘密』を思はず取り擧げて何思はず開いて見ると飛頁に『ジウリアノ樣へ。千八百——年聖日。アルポリオ』と書いてある。

私の心には華洒なアルポリオの顏が忽ちに映つた。而して多くの女に戀される彼を思つた。白熱的な情味を描寫するに巧な流行小説家。私は現に彼の小説を耽讀して居る。私等夫婦が此の樣になつたのも彼の小説の感化である。と思ふと同時に妻のジウリアノの先日來の行爲に思ひ當る節もあつた。

妻は再び扉を開けて這入つて來たが私が小説を手にして居るのを見て一寸顏を染めたが

『お前はアルポリオを知つて居のか?』との問ひに平氣で答へた。

『モンテリウスで紹介されました。』

妻は又直ぐに出て行つた。私は急いで自分の書齋に行つてその窓から妻が輕やかな足取で行く後姿を見送つた。

私の妻に對する道德上の信仰はむざむざと破られて行く樣に思はれる。私は自分の我利主義だとは是認しながらも、妻と云ふものは良人から受ける苦惱に打ち勝つて貞淑の德を全ふすべきものだと定めて了つて、其れを耐え得られぬ樣な妻を待つたのは自分の不幸であると悲しんでも見た。

私は纔てに於て變り果てたジウリアノに對して樣々の想像や疑惑を以て考へて苦しみ悶へた。彼の天才のアルポリオとジウリアノ…私は二人の間を考へずには居られなかつた。

否勝手にさせて置くがいい。去る者は追はずだ、自分はテレザに逢ひに行かう。

約束迄に未だ三時間はある。

私は又家を留守に出歩いた。狂つた色魔――。

私は或る時撃劍會でアルポリオに會つた。アルポリオと二言三言交へたが彼れの樣子を見ると強さうに思はれなかつた。小説に對する樣な尊敬は此の劍客に拂ふ事は出來なかつた。

私の稽古になるとアルポリオは眼を凝らして見て居る。

軈て稽古も終つて皆汗を拭き拭き休むで居る中に私は痩形の弱々しいアルポリオの姿を見た。

其れ以來私はアルポリオに近づかなかつた。又近づかうとも思はなかつた。ジウリアノの行爲に於ても別に疑しい事も見えなかつた。

事態は段々悲慘になつて、私はテレザと喧嘩してギエニスに跡を暗まして了つた。

吁！　私の失望せる荒敗せる水の都の生活、私は霧の巷の中に唯々此の世間の外に逃れ度いと悶へて居た。

私は三月の末頃羅馬に歸つた。而して初めて身心の平均を取り得て、心の目も醒めて來た。

ジウリアノは以前より健康を損じて居た。夫婦はなるべく接近しないやうに努めて居た。只無邪氣な子供等に依つて慰藉をうけて居た。

『母樣。私も復活祭にはバチオラに行くのよ』

との姉娘のマリアの言葉から夫婦は久しぶりて言葉を交はした。

私等は田舍の別莊に行く事になつて居る。私の心の何處かに幽な光がさして來

たやうな氣がされた。

二

是れが三年この方の悲しい想ひで、悲劇の幕開きである。

實母は例の慈愛を見せて二人の孫娘とジウリアノとを頬りと可愛がつた。妻は實母に對しては心からの眞心を現した。

實母とジウリアノとが窓に倚つて私の噂をして居る時に、私は知らぬ顔して這入つて行つた。

高臺には若葉が萌え出でゝ風が大きく小さく囁いて居た。

『紫丁香花は良い馨れ』

とジウリアノは云つた。私は二人の間に這入つて、そつと二人の手を握り度い

やうな氣がした。

目の前には想ひ出のギラリラが見えて居た。三人は其の方を見て居た。吁！

彼の老ひたる檜の葉蔭には薔薇の花壇が展がつて居り、檜の梢には燕が群つて歌つて居るのが明々と想像される。

『復活祭が濟むだらギラリラに行かうれ。花の眞盛りだらうれ』

私は一度慘酷に破つた妻の美しい夢を玆にまた甦さうとした。

私は何時の間にか二人の肩を抱いて居た。二人の髪は私の頰にハラハラと亂れた。空は美しく清く澄むで行くばかり。私の心は歡喜に踊つた。これが今迄の汚れた自分であろうか？

私等は何も話さなかつた。只楡の葉擦れの音と、其の黄色の花と、窓の下の菫の紫の花とが私等の眸に留つた。

不圖ジウリアノが私の腕を解いたので見ると顏色を變へて居る。

『花の馨が大さう強う御ざいますのれ』

と云つてジウリアノは母と其の室を去つた、私は茫然と見送つて居た。

三

月增しに私の心は甦つて行つた。精神は一度危機を通り越すと不思議に爽快になると見える。私の心は半ば朽ちた親株から新らしく萌え出した勢のいい蘖の樣に新鮮になつて來た。

私は冷々とする朝の空氣を吸い乍ら兄とよく散歩に出た。兄のフェデリッコは杜翁の好き相な誠實な男である。二人は農場を歩いたり果樹園を逍遙つたりした。其の度に兄は樣々の農事に關する智識を私に與へた。私は樣々な樂しい希望を持

つ樣になつた。而して斯うした感じを良い前兆のやうに思つても見た。吁！　私は此の田舍の平和と曖昧の中に、全く過去の穢れた事實から脫し得るのだと信じた。

私は兄を愛し、而して信賴した。實際兄は善良と健康と智能とを有する模範的な人格であつた。『土』を愛する此の人を私は崇高に見上げて居た。『田園の基督』である。

兄が野菜を大切にするは一通りではなかつた。無暗に花の咲いた枝を折つたり、何の事もなく踏むだり叩かれたりする草にも心を傷めた。私は或時の如き何思はず林檎の花を折つた事に氣づいて申しわけにジウリアノに持つて歸つた事もあつた。

四

私は折々ジゥリアノに花を持つて歸つた。或日私は兩の腕にこぼれる程の山櫨の花を抱えて歸つて來た事があつた。

心忙しくジゥリアノの室に這入つて行つて其の足もとに一抱の山櫨の花を投り出した。

『おお、まあ美しい！』

と露に潤むだ花の薫りにジゥリアノは咽び乍ら斯う云つた。

私は故意と莉に搔かれて傷付いた手をジゥリアノの前に差し出した。それは昔矢張此の花に傷付けられた時ジゥリアノは私の手を把つて美しい唇に血を吸い取つて呉れた事を思ひ浮べて再び昔のやうな愛に浸り度いと願つたが、それは遂に

空想に過ぎさつたことであつた。ジゥリアノは只淋しく微笑したばかり。此の頃の妻は只折々口に上る自然な情味のある言葉さへも何か平凡な言葉に更へてしまうのが常であつた。

夫婦の心を隔てて居るものは何であらう？　吁！　隔ての面衣がのぞかれて二人が樂しい幸福に醉ふ時は何時であらう？

ジゥリアノの寢室は私を悅ばせた、山櫨の花の薫は愈々室内に充ちた。妻は蒼ざめた顏をして餘りに高い薫りに苦しみ出した。窓を開けて私は家庭教師のエデスに花を音樂室に運ばせた。二人限りになるとジゥリアノは

『何ぞ面白いお話をして下さいまし』と其の身體を窓に恁せて顏を私の方に斯う云つた。妻の姿は後ろから光線を受けて、而して外の蒼い綠を背景にして居る。女神の樣な美しさに私はこれが自分の妻であるかとさへ疑つた。

其の刹那初戀の妻の姿が浮むで、其の美しい姿に抱かれて見度いと心が亂れたがそれはなし得ずに只徒らに心が慄えた。

私は妻の傍に行つて窓に凭つた。而して心にある何事をも告げ様と思つたが、又失望してはと思ひ斷念めて唯いい機會のみを待つ事にした。只二人限りになつて二人の靈を結びつけるはあの思ひ出のギラリラ、其處に行くより他はないと思つた。

ジュリアノと私は窓に並むだ儘默つて居た。妻は何か考へて居るらしく頸垂れて居た。風はそよそよと美しい黒い捲毛を弄むで居る。眞白い頸の上の小さい可愛い黒子は私の心を亂した。私は臆する心を勵まして妻の髪の上に掌を乘せたが其の手が知らず知らず繞つて遂にジュリアノを抱いて了つた。

『あらまあ』

と驚いて立ちよつて私を優しく瞰めた。其の心の慄えが見えて居る「私には未だお前を抱く値がないのだ」と私は心に叫むだ。

此の時敎會堂の鐘が鳴り始めた。すると次の室で騷いて居た子供等が這入つて來て私等二人に接吻した。パチオラ一帶の地に崇嚴な鐘の音が鳴り響いて行く……今日は聖土曜日、復活祭の時である。

五

その土曜日の午後私は兄と共に玉突場で新聞を讀むで居た。頭の重い厭な日で霧が深く罩めて居た。私は不圖新聞紙上でアルボリオの名を見出した。其の刹那私の全身に厭な感じが漲り渡つた。ああ！　彼の十一月の朝のジュリアノの姿。其の快さ相な眼、小説の文字、而して彼の汗みどろの顏をしたアルボリオ、擊劍

場の道具部屋の様子、私は遂に救はれないのであらうかと怖ろしさに身慄ひした。

私は遂に耐え兼れて其の室を出た。

私は今迄過去の事を忘れて何事も樂しい希望に進まうと望むで居た。それだのにアルボリオの名を見たのみで又此の様な心になつて了つた。吁！　私は最早ジゥリアノを自分の者とする事は出來ないのであらうか。彼の崇高な姿。實母と肱を交はして行く姿は全く天女の様で少しの汚れも見出せぬ。それだのに自分は何故ジゥリアノの純潔を疑はればならないであらう。自分には果たして其の權利があるであらうか。私はジゥリアノを新らしい女として何事も許して幸福な花園に導かればならぬ。

復活祭が濟むたら彼のギラリラに行く――が――が――あのジゥリアノの沈鬱な深い眼――あれには疑惑の光が宿つて居るのではないか。

私は窓際に行つて外の景色に心を慰めやうとした。空には羊の毛の様な雲が重りあつて風のまにまに流れつつ、切れて亂れて地平線に消えて行く。

私の心は稍靜まつて來た。而して不相應な幸福を求める事の愚かさをも考へた。而して愛、誠、平和の手の自分に下つた時の事を思つた。

私は窓に凭つた儘しみじみと泣いた。而して鉛色の影差す谷の流れを見入つて居ると突然階下からピアノの音がして來た。吁！　私の心は憧憬、希望、懺悔の雜多な思ひに亂れて行つた。それはジゥリアノの得意の『言葉なきルマニス』の曲であつた。私はそつと其の室に降りて行つて覗いて見た。それはジゥリアノではなくエヂス夫人であつた。私の持つて來た山櫨の花の薫は私の心を又も亂した。

私は此の花を見てジゥリアノに會い度く遂に庭に降りて行つた。而してジゥリアノがフェデリコと二人で話して居る姿を見た。手には私の與へた『戰爭と平和』

を持ちて坐つて居た。美と善と愛に滿ちた此のジゥリアノの姿を見た私の心は今迄の暗黑の思ひから明い日の光の下に返つて來た。

榆の花は風のまにまにジゥリアノの髪の上に膝の上にいつ迄も降りかゝつた。

兄は頻りと私にバヂオラに留つて百姓を習へと推めた。私は又兄に『戰爭と平和』を讀む事を薦めた。

私は妻の傍の椅子に腰かけて霧の中を流れて來るピアノの音を聽き乍ら二人の言葉には耳をやらず『戰爭と平和』を繙いた。其の中にはジゥリアノのつけたらしい線が私の目を引いた。吁！　其の線のひかれた行！　私の心は其の一句一行にすつかり奪はれていつた。妻はいつも私のした事を忘れないらしい。私は苦しみの餘り芝原の上に坐つて了つた。

ジゥリアノは兄とばかり話して居たが私が一心に本を見て居るのに氣ついて、

それを取り擧げた。而して心の亂れを紛らすやうにエヂス夫人の居る音樂室に私等を誘つた。

榆の花はジゥリアノの衣の上や地の上に澤山積つて居た。ジゥリアノは淋しい顏をして靴の先で地上の花を集めて居た。

六

次の日は愈々復活祭で種々の贈物が來た。中にギラリラの別莊番のカリスト老爺は露を含むた紫丁香花をジゥリアノに持つて來た。而して是非ギラリラに來て吳れ、今は紫丁香花の眞盛りで又燕は賑に檐に巢くつて居る事を語つた。而して私等の心を擽つた。私等は遂に火曜日に行く事にした。私はあの幾個もの扉を自分で開けて見度いので老爺に自分等の行く迄扉は開けずに置くやうに命じた。

呼！ ギラリアの昔、彼の耶蘇復活祭の日の事を私は思ひ出さずには居られなかつた。

私の心は只々喜悦に充ち充ちた。私の手は多くの小作人や娘達から接吻を受けた。實母も兄も微笑を漂えてジゥリアノを祝福して居るのに、私一人何で躊躇して居られやうぞ。ああ愛すべき妻ジゥリアノ！

七

次の日も、次の日も只ギラリラに行く事のみ樂しむで居た。

ジゥリアノの總てのものを私は得ればならぬ。額の上のおどおどした接吻。そこから一足飛びに燃ゆる唇と唇とを合はせる熱烈さに歸られればならぬ。私の心は情熱に燃えた。

丁度其の日の朝兄のフェデリコがカザルガルドに行くと云ふので其の馬車で往復する事にした。然し兄の居る馬車の中では私等は情熱のまゝに振舞ふ事を凝乎と押へて居なければならぬのか、それもよかろう。私は只二人限りになつた時此の心を一時にジゥリアノに注ぐ、彼の樂園を二人限りになつて肩を摺れ摺れに這入つて行く……私等は子供が行き度がるのを強いてなだめた。

八

樂園に愈々來た。私はカリスト老爺から鍵を受取つて戸の前に立つた。

『愈々來たれ。ジゥリアノ』

私の心は唯々若々しい美しい喜びに燃えた。妻も私と同じ思ひに唇を慄はせて居る。

『庭を一廻りしてから家の扉を開けませうれ』

と妻は雅かに云ふ。

妻は三年前の事を云つて懐しがつた。私は堪らず抱きよせ様と思つたが其の儘庭の奥へと行つた。

妻の寂みを帯びた鼠色の姿は艶かな紫丁香花の間を行く。露を含むだ花が裾に縺れる、青空には白い雲が動き地には瑞々しい青葉が蔓つて居る。紫丁香花の枝には黄色の薔薇が巻きついて蔦尾が其の緑色の剣の様な葉の間から蕾を抬げて居る此の三種の花の馨が二人を醉はせて了つた。燕は私等を繞つて歌つて居る。

『何時迄も私此處に居度う御座いますわ』

『私も居度いよ。吁！　私は什麼に今日を待つたろう。吁！　昔の戀、それをお前は覺えて居るの。三年前の彼の樂しかつた時の事を……今迄私の爲た事は

皆悪るかつた。お前の苦勞に比べたら私は什麼事をしてもいいのだ。私は是れから今迄の罪を償はねばならぬ。ジゥリアノ、赦してお呉れ。然しお前にそむいて居た時も、お前を妹のやうにして居た時も私はお前を誰よりも愛して居た。私はお前に忘られて行くのを悲しんだ……赦して呉れ。何事も、而して私の此の燃える様な希望を容れてお呉れ。れ、ジゥリアノ。』

花や燕の間をジゥリアノは什うしたのか苦し相な蒼い顔をして默つて歩いて行く。

私はジゥリアノの手を握りしめて唯々其の心に響けと自分のせつなる心を語つた、が妻は何故か默つたまゝ苦し相に仆れ相になつた。それは後で判つたが、私は自分の心を赦して呉れぬかと失望した。

弱々しい聲で

『茲に休みませう』

とジュリアノは斯う云つて、休息臺に二人は寄り沿つて坐つた。

『お前の嘆くのは無理ではないが……然しお前は犠牲では無い、今迄の涙は無駄では無い。何事も悟つて呉れ。私の愛を。私が家を外に出歩いたのはお前の心を得たいため、そしてお前は茲に居る。何事も打ち開けて呉れ何が悲しい事があるか。』

『否、何も……』

妻は震へて斯う云つた。私は妻の前に跪いて了つた。

私は妻を抱いた儘妻の眼から流れ出る涙を唇に受けた。

『ジュリアノ、お前はこれ程愛して居る私を思はなかつたかい。此の祝福を夢見なかつたかい。吁！　ジュリアノ、二人は幸福な生涯に這入らう。』

妻は此の時悲痛の聲をあげて泣き出した。其の泣き聲は決して悦しさ極まつて

の泣聲では無い、絶望の叫びだ。私は此の刹那妻を飛び退いた。心も全く妻から放れた。妻はハンケチに顔を埋めて獻欷をしてゐる、日光を沿びた花の馨、世は春である、恋な此の春の空氣の裡に私は狂人になり相だ。吁！　突然に怖ろしい恐怖は私を襲つた。『妻は純潔で無い』

此の一瞬時、妻は私を幸福の絶頂から絶望の淵のどん底につき落したのだ。

私は妻の手をもぎとつて其の涙の理由を詰問した。妻は真蒼い顔をして、それでも斯う云つた。

『私は……私は心弱くつて泣きました。何卒赦して下さいまし、さあ私と並んでお坐りなさいまし。』

妻は常も私の苦しむのを非常に心配した。今のもそれで、私の失望の極の苦痛を見るに耐えずに斯う慰めるやうに云つた。私は妻の此の親切を知つて居るので

折々苦しい様な有様を見せて妻を斯いては喜んだ事があつた。

『私等は幸福になつたので御座います。彼の魚池に行きませう、而して此の涙を洗ひませう。』

ジュリアノは私を慰めやうと思つて身の苦痛を押へて居る様に見える。其の泣いた目は微笑を湛えて居るのが既う私の心を奪つた。私は又も妻を固く抱いた。

而して二人は何時迄も唇を合はした。

『吁！　疲れました。』

と云つて私をも坐らせた。再び燃えた情熱に私は何事をも忘れた。静かな花の咲いた庭に私ばかりの接吻に仆れた女。思ひ出の秘密を包むだ花園。懐しい家が目に入る。燕が翔つて居る。

『さあ起して頂戴な』

と微笑むで自分から私に接吻した。

『嬉しう御座いますわ。』

と妻は譫言の様に云つた。

『私既う疲れて膝が動きませんから手を曳いて下さいましな』

『では家に行かう。ジュリアノ』

『何處にでも』

私は妻を捨いた儘歩いた。妻の小さい黒子が眼について私の心を囚へる。

『私等の柳を見ませう。』

二人は池の岸に着いた時斯う云つた。

『大きくなりましたのね。植えた時は未だほんとに小さう御座ゐましたわね。あれから今度が初めてですわ』

妻は斯う云つて噴水で顔を洗ひ私に接吻した。其の時の顔は何とも名狀の出來ない表情があつた。憐れな妻は此の時死を覺悟して居た。

二人は默々と家の方に動いた。二人の胸は苦しく波うつて居た。

『あら。此の樣に……』

妻は私の手を把つて自分の胸に押し當てた。

心臟の裂ける樣な鼓動が着物を徹して判る。呼吸が今にも絶え相。二人は蹣跚き乍ら檜の根元迄行つて坐つた。

妻は私の肩に頭を投げかけた儘で

『一緒に死にます。』

と叫んだ。此の言葉を聞いて私は愕然とした。

夢の樓閣の樣な家が眼の前に浮いて居り何處も彼處も燕の巢に掩はれて蜂の巢

の樣に重りあつて居る。二人は燕が集つたり、轉つたりして居る樂しい有樣を見て居たが軈て私が先に行つて扉を開けて居るとジウリアノはそつと近づいて私の首を卷いた。私は其の處女の樣な仇氣ない樣子に恍惚とした。

二人は一人の心地になつて中に這入つた。

ジウリアノは私の身體は貴郎に捧げたものですと云つて私に抱かれて暗い階段を登つた、而して二階の暗い室の中に這入つて行つた。

九

產な戀人の樣に二人は卓に相ひ對した。二人の眸は互に悅びに輝いて居る。燕の合唱や薔薇の花壇や、美しい花に綴られた春が私の身を繞つて居る。二人は過去の厭な思ひ出を忘れて未來の希望に燃えやうとした。

『今夜茲に宿つて行かうか。而して初めて宿つた時の事を想ひ出さうではないか。
れ。將來はお互に愛しあつて幸福な日を送らうではないか、小供の樣になつてれ。
私はお前を純無垢な心で愛する』
『ツリオ樣！既う其の樣に仰しやるのはお止め下さいまし。私苦しくつて……』
ジウリアノは重さうな眸の中に愛情を湛えて斯う云つた。
『お前思ひ出の白葡萄酒を飲まないかい。』
『飲めませんわ。既う一滴も』
『何處か惡いんじやあないかい。』
『露臺に行けば治りますわ。』
で私は妻を扶けて露臺に行つた。檜の老樹は二人の目の前に聳へて居る。燕は
騷しう啼いて居るが庭の靜けさは身に迫る樣だ。燕の翼の摺れ合ふ音は樹立の

茂みに吸ひ込まれて行く。私は此の黃昏の甘さに醉ひ度かつた。
『此の邊には夜鶯が居たつけれ』
など云つたりフェデリコの歸りの遲ひのを二人は希つたりした。
『樂しいの？私を信じて呉れるの。』
などゝ云ふと妻は頷いて私の身體に身を投げたりした。
『吁！　幸福だれ。既う死んでもいゝね。』
『死んでも……』
絶え入る樣に笑つて
『吁！　私直ぐ死ぬかも知りませんわ』
『其樣な事を云ふものじやあない』
と云ひ乍ら私は幾度も幾度も接吻を續けた。

『明日も又來やうれ。而して生涯を新にする、昔のやうに樂しく……』

『未來の事は云つて下さいますな。私未來が怖しう御座いますわ。』

ジウリアノは氣狂人の樣になつて私に抱きついて接吻を重ねた。

＋

『既も七時ですわ。フェデリコ樣がお歸りになるでせう。貴郎、一寸行つて見ていらつしては。』

で私は階段を降りて老爺に馬車は來なかつたかと聞いて見た。が來ないとの事であつたので再び上つて來た。妻は歸り仕度をして居た。

『私の顏は眞蒼でせう。でも確に生きて居ますわ。』

と强いて笑はうとした。其の苦し相な微笑は丁度巫女の笑顏のやうに見えた。

『あ！　私洋傘をあの休息臺の處に忘れて來ましたわ。』

『私が行つてとつて來やう。』

『それには及びません。爺やをとりにやりませう。』

と云ふのを私は安樂椅子に妻を休ませて置いて出かけやうとして。ふと妻には寒からうと思つて扉を閉めやうとした。

『いえ。私に外の景色を見せて下さいまし。今頃が一番美しう御座いますから。』

金色の夕日が此處彼處に朦朧と輝きだすと紫丁香花の美しさ絹の綾目が光る樣に飜つて居る。柳は長く垂れ、總ての花や樹は輝いて居る。私は急に不安の念に襲はれた。それは極度の悅びの後に來る把み處のない後悔の苦痛——歡樂儘きて悒愁が犇々と迫る。

『私は眼をつむつて此處に何時迄も居度う御座いますわ。』

と夢の様に云つてジゥリアノは急に震へ出した。

『寒いんですわ、ツリオ様外套を取つて來て下さいませんか。』

私は急でカリスト老爺の處から外套をとつて來た。而してジゥリアノの止めるのを強いて私は休息臺の處に洋傘をとりに降りた。ジゥリアノの名を呼ぶと妻は露臺から顔を出して見下した。其の蒼い顔。私は何時迄も其の面影を忘れなかつた。

私は小徑を走り下つた。殘つた燕が淋し相に舞つて居る。私の心は又急に亂れて來た。妻に對する疑惑。直ぐ死ぬ、死ぬと云ふ言葉、ジゥリアノは今の幸福な私の愛の手の中に死ぬかも知れぬ。ジゥリアノの言葉には不當な前兆があるやうだ。

私はしつとり露を含むだ草原を踏むで休息臺の處に行つた。洋傘はあつた。

先程ジゥリアノの涙を流したは此處である。其の涙を見て失望したのも此處だ。未だ幾時間も過ぎぬのに昔の様な氣がする。一層怖ろしさが迫つて來る。麗しかつた紫沈丁香の茂みの葉擦れの音も疑惑を囁く樣に思はれる。四方は漸々と暗黑になつて行く。

萬事過ぎ去つたのではあるまいか。自ら死ぬ事も出來ず病に斃れやうとするのではあるまいか。幸福の絶頂にある時でさへ死と云ふ言葉が彼の唇に上つた。死！それを思ふ刹那今も今彼の氣味の惡い室にジゥリアノは死苦にうめいて居るのではあるまいか……私はそれと思ふと夢中で飛び出した。而して呼息を切つて二階へ馳せ上つた。

『まあ。什うなさいましたの。』

とジゥリアノは驚いた。

『お前が呼むだと思つて急いで來たのだ。』

ジゥリアノは蒼い顔をして冷くなつて居た。

『冷たいね。お前の手は。扉を閉めやうか。』と私は妻の手をとつて云ふと

『いえ構ひませんわ。それよりか貴郎、私の傍へいらつして下さいまし。』

私は妻の傍へ坐つた。

『ツリオ樣、既う夜になりますのに、フェデリコ樣は什うなさいましたのでせうね。私既う我慢が出來ませんわ。』

『ジゥリアノ。お前は何か私に秘して居る事があるね。此の幸福なギラリラに來てからお前は何か苦しむで居る。何事も打ち解けてお吳れね。私が先程失望した時何でもないとは云つたが、さあお前の煩悶を話してお吳れ。』

と私は叫むだが、ジゥリアノは默して居た。暗い顔をして。暫くして、

『唯、病氣の故で御ざいますわ。』

と云ふ妻の唇は震へた。

『死ぬ程辛い病氣とは何？』

『否、何でもありません。今に判りますから何卒信じて下さいまし。あら。貴郎の御顏が蒼う御座いますわ。貴郎こそ御心配遊ばして……さあ接吻で私を暖めて下さいまし。』

二人は相抱いた。

『今夜はお前を守つてやる。而していつかの樣にお前の眠つた口から私の名を呼ぶのを聽いて見度い。さあ。お前の病氣も治つて二人は幸福になるんだね。』

妻は嬉し相に頷いた。

此の時何かの音が二人を驚かした。

庭園は一面紫紺の色に溶けて靜寂な夜の色の中から高い笛の音の樣な啼聲が響いた。

『柳の枝で夜鶯が啼いて居ますのね。』

と云ひ乍ら妻は私により添つて鶯の音に聽き惚れた。

夜鶯は丁度枝に言葉を知らぬ詩人がハートの儘の調を宿して居る樣に種々の情をこめて啼いた。悲歌の知きかと思へば蜜の樣な甘い甘いメロデーに、軌るが如く流るゝが如く歌つて居る。花の森は蕭然として其の歌を聽いて居る。西の地平線には幽な輝が殘つて明星が露の玉の如くに光つた。

私が立つて夜鶯の音を聽いて居る時、妻が私に凭りかゝつたので氣づくと妻は死人の樣になつて仆れ樣とした。私は驚いて胸を開いて手をやつた。

此の時また流れるやうな鳥の歌――――

十一

ジゥリアノは間もなく我れに歸つたが足の力はぬけて歩む事は出來なかつた。私等の着て居る物を皆ジゥリアノの身體に卷きつけた。馬車の中でもジゥリアノは苦しいと云つて默つたまゝであつた。

私等の歸宅が餘りに遲いので實母は心配して居た。玄關に上つた時のジゥリアノの顏色は非常に惡るかつたので實母は驚いて騒ぎ立てた。フェデリコは醫者を迎へに行かうと云ふと、ジゥリアノをそれを怖れるやうに何でもないと打ち消して自分の室迄皆に連れられて漸くの事で階段を登つて行つた。

私は今夜は妻を自分一人の看護しやうと決心して居た、妻が衣服を着替へる間私は次の室で待たねばならなかつた。私は今夜こそ自分の愛を妻に示す時だと思

つた。

すると兄が這入つて來てジュリアノの病氣は何も心配する程ではないと云つて食事に誘つたが私はそれを斷つた。間もなく今度は實母が這入つて來た、而して私が妻の室に行くのを止めた。

實母は躊躇して居たが、

『お前はジュリアノが彼の手術の後姙娠すると危險だと云ふ事を聽かなかつたの。』

私は不思議な言葉に驚いた。

『ジュリアノの姙娠をお前は知らないのかい』

『エ！　姙娠!!?』

私の驚きは言葉にはつくせなかつた。私はすぐ狂人にならなかたつのを不思議

と思ふ位、暗い心に忽ち電光がさし込むで紅火に爛れて行く樣な苦悶と驚愕に頭は混亂して了つた。が然し私は實母の前では何とか云はねばならなかつた。

『私は未だ其の事は知りませんでした。が然し手術も成功したのですし、別に心配の事はないと思ひます。』

『兎に角用心をしなければいけないよ。私も以前に氣づいた事もあつたが、二三日前迄ジュリアノはそれを打ち消して居たし、什うも變だとは思つて居たのですが、此の頃は一層ジュリアノは身體が惡い樣子だからエベスチ博士に來診をうけるやうにしたがいゝれ。』

『左樣しませう』

と私は答へた。

私は直ぐジュリアノの部屋に行かれば居られなかつた。實母は靜かにせよと注

意して去つた。

急に家が倒れて破壞の慘狀が身のまわりを繞つて居るやうな極度な苦痛に私の心は攪亂されて了つた。

十二

私は母の言葉を耳にした此の刹那に十年も齢をとつた樣な氣がした。私の內的生命の急變は造化の最も驚くべき顯著な現象であつた。

吁！　私は什うしやう。私は總てが了りを告げる迄自分の部屋に籠つて居やうか。否々何事も知らぬ顏をして妻にまみえやう。

私はそつとジウリアノの室の前迄行つたがエヂス夫人が靜かに靜かにと制した。

私はエヂス夫人が出て行くと室內に這入つた。すると紫色の外套を鼠色の衣服とが見える。ああ此の衣服。紫丁香花の露に濡れて愛を囁いた其の美しかつた姿……それを思ふと私は此の室を逃れ去らうとしたが、寢臺に近づいてそつと幕を開けて見た。私は忌々しい想像を以て妻の姿を見た。吁！　美しい身體には姦通の血か、穢れた血が渦を卷いて居るのだ。是れは想像ではない必然に來るべき事實だ。怕ろしい豫想……。

然し私は未だ此の事を疑ひ度かつた。が矢張いろ〳〵と思ひ比べると疑ふ餘地がなくなつた。山櫨の花の馨に嘔氣を催した事、ギラリラの庭園であつた事——涙、歔欷、曖昧な言葉、神巫の樣な微笑、死といふ言葉、無數な事が實母の言葉を繞つて私の腦を亂す。刳る。

ジウリアノは額のところ迄蒲團をかぶつて居るので、醒めて居るか眠つて居る

か判らない。若し妻が目さめて話しかけたら私は何としやう。

私はよう〳〵と幕から出た。而して階下へ下りやうとしたが吸ひつけられるやうに再び寢臺のところ迄歸つて來た。而して純無垢な高潔な其の額を見て居た。ああ、此の額に私は幾度接吻したらう。『眠り顔を見てお前の夢を續まで』と云つた事が胸に浮ぶ。

妻は何を樂しみに生きて居るのであらう。私も何を望むで生きて行くのであらう。私の愛の強いのを悟つた時、妻の苦痛、悔恨は什麼であつたらう。良人は自分の足許に仆れて罪を謝した時、自分の純潔でない事を思つて什麼に心を刳つたであらう。

あゝあの樂園に着いた時の千變萬化した妻の顏……一々眼の前に浮むで來る。未來を云ふのを怖れて只現在のみを樂しまうとした、妻。ああ。斯う云ふうちに

も妻は覺悟の死を實行しはしないだらうか。其の刹那、妻の姙娠の結果を想像する。子供が生れる。實母や娘達に抱かれる……吁！　其れを私等は何と見て居るだらう。妻は死と罪と何れを選ぶ……妻の秘密は永遠に埋め去るであらうか？

私の生涯は什うなるであらうか？

然し私はジゥリアノ無くつては生きられぬ。私が罪を犯して居る間妻が堪え忍んだ樣に私は妻を赦さればならぬ。寛大な心で私は妻を愛さればならぬ。

ジゥリアノは身動きもせずに居る眞當の熟睡であらうか。疑を避ける爲めの僞りを裝つて居るのではあるまいか。神經の過激な疲勞の後の眠りであらうか。毒藥の昏睡ではあるまいか……妻は常にモルヒネを持つて居た。それを何時の隙にか飲むだのではあるまいか。私は其の額ににじむ汗を見て驚いて何とはなしに蒲團をそつととつた。

『あら。ツリオ様』

ジウリアノは眼を開いて居た。

『おや、眼を開いて居たのかい。』

『今一寸眠りました。』

『掻巻が熱苦しいだらうと思つてれ。』

私は蒲團をとりのけてやつた。

私の其の時の心の狀態は什麼であつたらう。私は此處を去らうか、居らうかと躊躇したが妻は疲れて眠り度いから彼方へ行つて呉れと希つた。私は今夜は此處に眠らうと云ふと

『貴郎も疲れていらつしやる樣ですから何卒お休み下さいまし。私貴郎が茲にいらつしやると眠られませんもの、』

ジウリアノの何たる受嬌のある聲、而して平常と少しも變らぬ態度、然し何ぞ胸の奥に決心して居るから斯うした沈靜な樣子を示す事が出來るのではないか。自殺！、ああ、何としやう。私は茲を立ち去る事が出來やうか。私什うともなれと自棄になつた。

『私は行くよ、それならお寢み。』

妻が接吻をと云つた刹那私は非常な嫌惡を感じた。

母が這入つて來た。

私は室を出た。

私は自分の室に這入つて寢臺の上に身を投げた。而して戰慄を續けた。

私は何で妻一人を置いて來た。妻は必ず自殺する。今夜。私は左樣思とよろよろとして室内の器具に躓き乍ら窓に凭つた。

鎮静な夜氣の中に單調な蛙の聲が響いて來る。星の瞬きが悲しく光つて居る。

又もジウリアノの事が氣にかかり出した。

私はジウリアノの室に行かうと廊下に出るとエヂス夫人に逢つた。ナタリアをジウリアノの許に置いて來たとの事。

私はそれで安心した。妻は今夜は決して死にはせぬと思つたので、急にマリアの顏を見度くて其の寢室に行つた、私はジウリアノに似た娘の顏を見て居ると終夜茲に居たい氣がしたが、思ひ切つてエヂスに別れて自分の部屋に歸つた。而して寢臺の上に身を投げて泣いた、慟哭した。

十三

翌朝目が醒めて。再び苦しい日を迎へた。私は是れから什うしやう、昨日の夢

は現實の苦痛に破られて了つた。左樣だ！　自分は唯此の現實の苦痛から思ひ切つて逃れるより他ない。拳銃、彈丸！

兄が這入つて來た。而して既う遲いと云つて窓など開けた。

『お前昨夜心配したれ。』

『隨分苦しみました。』

私はせめて兄にだけでも此の心を打ち開け度かつた。

兄は私の手を把つて脈の不調に驚いた。

『いつか河沿の道を通ふて森に行かうではないか、オルランド（馬の名）に乘つて。ジウリアノも今日は快い樣子だから一緒に、而して何時頃行かうれ。』

『今日か明日』と私は直ぐと答へた。

『大變早いれ。それなら左樣しやう。』

兄は快活に斯う云つて出て行つた。

十四

私は是れから偽りの假面を着ければならぬと思ふと苦しい氣がした。先に母の室に行つて話したが、母が私がジゥリアの姙娠を知つたと語つた事を聞いて直ぐジゥリアノの寢室に行く氣になつた。

妻は既う私に秘密が判つた事を知つて覺悟して居るのであらう。私は家内の者の前で何處迄も平靜を保つて偽られねばならぬ。而して妻に對しても自分は什麼に事を平和に落着させやうと努めて居るかを知らせねばならぬ。

私は不圖音樂室に行つて見た。するとマリアが私に飛びついた。

『お父様散歩に連れてつて頂戴。昨日お父様方は私をギラリラに連れてつて下さ

らなかつたんだもの。お父様。ギラリラは什麼に面白かつて？』

小鳥の様に娘は早口に喋舌つた。而して私の言葉に從つて母の室に行つて叩をした。ジゥリアノは自ら扉を開けたがすると私の居るのを見て忽ちにして顏色を變へた。

私はそれから幾分間、殆ど自分のした事は知らぬ。熱病患者の様に。唯二人の娘が騷いで居たのを知つて居るのみマリアは

『ナタリアは昨夜は御母様と一緒に寢ちまつたのね。私は今夜御母様と寢るのよ。』

『私は姉様より餘程小さいんだもの。』

無邪氣な娘等の言葉には笑まず答へず私等は只默つて居た。ジゥリアノはナタリアを抱いて唇を髮に埋めて居た。私は何とか云はねばならぬ。

『御母様がアベスチ博士を迎ひにやれと仰しやつたから、手紙を持たせてやらう。而して午後には兄さんと河沿道を通つて森に行く。歸つたら又來るかられ。』

髪の中の唇は唯微に動いたのみ。

十五

翁鬱とした森を指して蛇の様に迤つた幾曲りかの美しい河の岸を地を叩いて馬を馳せて行く、私は不圖アルポリオの事が心に浮むだ。私の身はヲナヲナと痙攣し出した。質素な純朴な兄の姿を見て居ると神經質な弱々しい小説家アルポリオの姿が卑劣視せられる。人間を材料扱ひにして平然たる彼の藝術家……貞操を以て評判な淑女を一時の玩弄物として得々たる狡猾な藝術家の心理！　彼の獸的な慘酷な態が目のあたりに浮むで來る。純潔を以て誇つた最愛な妻は良人の冷遇に耐

える事が出來なくて遂に彼れの如き惡魔に汚されて了つた。私は突き繁つた木立に頭を幾度か突きさされ乍ら磨石の崖を落ちれば必ず死すると覺悟して兄の『止れ！』と云ふ言葉に耳も借さず突き進むだ、狹ひ道に來て下を見下すと青い淵が泡立つて居る。兄は此の時馬を馳せて私に接近した。

『お前は正氣か？』

兄は顏色を變へて私を叱る様に云つた。

『馬馴らしを一寸して見ただけです。』

『眞當に危險な事をしたものだ。よく落ちなかつた。此のアロソ河の崖で、よく無事に濟むだ。萬死に一生と云ふものだ。』

私等は死の河と云はれた怖しい流れを瞰下した。河は油色して執念深さうに渦卷いて居る。私は此の流れに身を投げたら今の苦悶を忘れるであらうと思つたが

兄を一緒に殺す事は出來なかつた。

私は心配相な顔をして居る兄を何としたら慰める事が出來やうかと考へた。

兄にジウリアノの罪惡を打ち開ける。然し兄はジウリアノをこよなく信じて愛して居る何で私の言葉を信じ樣。唯私は彼の憎いアルポリオと決鬪して殺すより他無い。すると私の目前に私に敗れたアルポリオの死體が草葉の中に血にまみれて死んで居るのが目に浮ぶ

『それ炭燒場が見え出した。』

と兄は馬の足を緩めた。

兄が炭燒場を見廻る間、私は馬をアソロ河の方へと向けた。丁度私を誘ふ樣な怖ろしい其の流れ。吁々私は死の河に趣うか、歸らうか私は思ひ惑ひつゝ遂に心の惡魔を捨てゝ馬を返してしまつた。

斧の響が森に谺した。其處此處には三角塔の樣に材木が積むであつた。私が其處へ馬を近よらせると兄のフエデリコが行むで居た。

兄はヂオバンニと云ふ老人を私に紹介した、老人は目には悲しい色を湛えて居たが笑顏は羨しい程に輝いて居た。

私等は此の老人に別れを告げて歸り路についた。

空は漸々明く霧が晴れたり、閉ざしたりした。あゝ思へば半ラリラでジウリアノと夢の樣な眸を見交はしたのは……吁……丁度……

今頃であつた。

兄は先程の老人の話をし出した。子供が十四人もあつて、意地惡だと云ふ女房に死に別れてから自分の痩腕一本で役立たずの子供を養つて居ると云ふ事など語つて彼れは聖人だと感心して居た。

十六

私はなるべくジュリアノと二人限りになるのを怖れたが、遂に其の機が來た。

ジュリアノに會はうと自分の室を出たのは最早眞夜中のこと、バヂオラは森と鎭まりかへつて居た。子供や實母の平和な睡息も今の私には悲しかつた。

ジュリアノは石像のやうに卓の隅に彳むで居た。

二人は唯默つて居た。丁度劇場の背景を疑視て居るやうに、蠟燭の火はトボトボと波打つて居た。

『お前私を待つて居たのかい。』

『ハイ。』

『御母さんから聽いた彼の話は眞當なのか？』

『はい』

ジュリアノの此の言葉は實母の言葉より鋭く私の肺腑を貫いた。

『吁！　眞當か！』

『お聽き下さいまし。私は斯うして貴郎にお目にかゝらうとは思ひませんでした。今迄生きて居たのも皆運命で御座います。』

妻は茲迄辛くも云つた。私は傍の椅子に凭つて兩手で顏を埋めて妻の言葉を聽くばかりであつた。

『貴郎は昨日も仰しやつた通り私故に苦しみ又私を慕つて下さいました。私は貴郎の只一人の戀人で御座いました。私は幾度自殺しやうと思ひましたでせう。ですけれど後に殘る子供やお母さんの事を思ひますと遂…只生きて居るは身體だけで御座います。』

と息を切つて、

『此の様に弱い身體がよく斯う迄煩悶に打ち耐える事が出來ると驚くばかりで御座います、貴郎は種々希望をお持ちになつて昨日迄は幸福でいらつしやいましたのに・・・それに貴郎からいろいろ懺悔を伺つた時、又貴郎の愛を覺えます時、私の苦しみは什麼でしたでせう。私は貴郎の前で死ぬので御座います。決してお疑ひ下さいますな。私は貴郎が私に冷かつた時も、また什麼な場合も私の愛は貴郎から去つた事は御座いません。既う私は貴郎から充分の愛を受ける事の出來ない身となりました。私は貴郎を愛する事の出來ない迄に穢れて了ひました。私は實は貴郎がアニスからお歸りにならぬ迄に自殺する積りで御座いましたが、私が死にましたら必ずお母様は種々お疑ひ遊ばすでせうと思ひますと・・・ても既う死ぬより他ありません。日が經つ程苦しみが增すばかりで御ざいます。死ぬ用意は充

分致して居ります。』

茲迄云つてジゥリアノは遂に仆れて了つた、軈て苦し相に

『眞當に過失程苦しいものは御座いません。』

『可愛相に。』

此の時の私の皮肉な微笑！　私は是れ以上の慘酷な事は云へなかつた。

『せめて御母様の接吻だけはお赦し下さいまし・・・』

私の心には憐愍と親切の情とが起つた。

『昨夜も毒を呑もうと致しました。でも斯うして生き延びて御母様のお口から秘密が洩れて此の様な悲しい事になつたのも皆運命で御座ります。せめて死ぬ迄に今一度貴郎の接吻を受け度いと思ひまして昨夜もそれを思ひました、何とか貴郎のお言葉を承つて私は息斷えませう・・・』

『お前は生きねばならぬ。』

『否え。それは怖しい事で此座います。私は何とかして自然に死に度う御座います。茲にはモルヒネも昇汞も御座いますが是れで死んでは疑はれるだけで御座います、何とか上手に死れますやうに御相談下さいまし。』

と云つた妻の顔には崇高い程の決心がみえて居た。而して何を云ふかと思つたらアソロ河を私がしたやうに馬で行くさうすれば必ず死ぬ事が出來ると決然として言つた。私は急に哀れになつて、

『お母さんと二人の娘の爲めに而して私の爲めに生きて居て吳れ』

と咽ぶやうに云つた。ジウリアノは此の私の言葉を考へて居たが、殆ど氣狂の樣に私の胸にすがつて無闇と接吻をつゞけた。愛情の最後、酷薄、不運命、二人は一緒に仆れて永い間泣き續けた。

暫くして二人には生きねばならぬと云ふ考へが強く確に起つてきた。而して此の事件を何とか終結しなければならぬと決心した。

私は妻をいたわつて抱き起し水など持つて來てやつたりしたが、不圖アルボリオの事が心に浮ぶと再び私の心は慘酷な思ひに慄えて來た。妻は未だ相手の名を云はぬではないか。呼！　什麼にして自分の愛した女は罪を犯したか、私は『其の男の名を云へ！』と叫むだ。ジウリアは顔を埋めた儘激しく咽び泣きをして居る、私は尙ほも十一月の初めの頃の事や、小說本の事迄を取つて責めつけた。

『赦して赦して、ああ、私は苦しくて既う生きて居られません。死にます、死にます。』

ジウリアノは既う狂人の樣に狂ひに狂ひ廻つた末に遂に椅子蒲團の上に仆れて了つた。

十七

二人は家内の前で不思議に巧に心にの中を欺いて居る事が出來た。ゴベスチ博士は妻の身體を診て神經が非常に疲れて、身體は殆ど衰弱し切つて居るから注意せねばならぬと云つた。私は博士が腹の兒を犧牲にしなければ駄目だと云ふかと思つたら、それは餘りに母の體が弱つて居るから其の樣な事は出來ぬと云つた。私は此の場合夫婦の救はれるは腹の兒の死！　只それのみだと思つた。家内の者は唯未來の兒を待ち受けて居る。それが私の心を什麼に苦しめたであらう。

太陽が沈むだばかりの或る夕方私等は楡の樹蔭で這麼事を語り相つた。

『私は何の樣な事をしても貴郎をお慰めしなければなりませんわ、只それは先日申した事を斷行るより……』

『お前は腹の兒を愛するかね？』

『何卒其の樣な事は……私は憎う御ざいます。』

私は其の言葉を耳にして少しは心も休まつた。

『それで私も安心した。』

と私は妻の手をとつて斯う云つた。私は產れる兒を妻に强いても呪はせ度い。吁。私は後に至つて大膽なる所業を敢てせしめる爲めに精神上の罪も犯させたのであつた。

妻は幽な黄昏の光の中にそつと胸に十字を切つた。

十八

四ヶ月、五ヶ月と經つとジウリアノの身體は全く變つた。淺間敷い其の姿！

悪性の歡樂の醜い酬いが次第に彰れて來る。

私は斯うした妻の姿を見るに忍びず羅馬の家に歸らうと決心し、其れを皆に打ち開けて種々な準備をした。

出發の前夜妻は一人で這入つて來た。

『愈々お出かけになりますのね。それなら既うお歸りになりませんのでせう。』

妻は失望と不安に滿ちて私を見た。

『否、歸つて來る。兎に角、今は二人とも落ち着いて考へねばならぬかられ』

蠡斯が銀の樣な啼き聲をして居る。二人は露臺に出た。而して冷い欄干を握つて朧に流れるアソロ川を敢下した。農夫の唄聲が微風に運ばれて來る。蠡斯の啼聲が又一しきり。其の夜程、私は恐怖と情味との紛糾を覺えた事はなかつた。

十九

羅馬に歸ると私は只アルポリオの消息を知り度いばかりに飛び歩いた。逢つたら什麼に耻しめてやらうか、何と罵つてやらうかと私は彼の常に行く料理店にも行き、擊劍場に行き、果ては書店に立ち寄つてアルポリオの小説を買つて店の小僧からアルポリオの近狀など聞いた、彼は近頃羅馬には居らぬ。何でも重い痙攣狂にかゝつて居るとの事、吁！　私を神は扶けて下すつた。私は彼の樣な卑劣な弱者を此の手で殺さずに濟む。

私は書肆の店員からアルポリオが今ネープルに來て電氣療養をうけて居る事や、齡が三十五歳だと云ふ事など聞いて歸つた。買つて來た小説の中には必ずジウリアノをモデルにした小説があるに違ひない。二人の關係は何の邊迄進んで居

たか？

私は無限な苦しい想像に纏繞かれた。

二十

私は熱苦しい羅馬には永く止まる事が出來なくつてバチオラに歸つて來た。何ものかを待つやうな樂しみもあつた。

餘りに私の歸りが早かつたので實母もジウリアノも大變嬉んだ。

『まあよく此の樣にお早くお歸り下さいました。』

とジウリアノは臆する樣な顏をして斯う云つた。

『留守のうち何をして居たの？』

『貴郎ばかりをお待ち申しました。』

『私もお前ばかりの事を想つて居たよ。』

『まあ嬉しい！　お禮を申しますわ。』

私は久しぶりで情に滿ちた嬉しさを感じた。

二十一

私は又もバチオラの生活を始めた。其の後は是れかと別に思ひ出される程な大事件は無かつた、時は日時計と共に流れ、蟋斯の啼く音は楡の樹の下に單調に響いた。

十月の半ばも過ぎて子供の生れる時が近づいたと共に私の不安は日增しに堪え難くなつた。

私は無闇と馬を馳けらして氣を紛した。エベスチ博士は間もなく着いた。

或る時、ジウリアノと私と二人限りになつた事があつた。其の時、

『ツリオ様、扶けて！』

と妻は急に手をさし出して叫むだ。

『愛して、只愛して下さいまし。後悔の無い様にツリオ様、何事も赦して下さいまし』

ジウリアノは既う死ぬと覺悟して居る。

『私はいつも貴郎を愛して居ました……それだのに此の様な最後を……吁！　私が死にますと後に殘る……』

『ジウリアノ。既うお止し、まあ靜かにおし』

私は恐怖に唯々戦いた。妻は丁度死人の様に私の腕に摑つて呻吟くやうに叫むだ。

『ツリオ様、扶けて……せめて殺して下さいまし。既う堪えられません。』

『今少しの辛棒だから、氣を張つてお出で。』

私は急いで鈴を押した。

『若し、私が此の儘、人事不省になつて……若し死にましたら……皆様が私を圍むでいらつしやる時に私が若し熱の爲めに何か……何か云へば……』

此の時實母や博士や家庭教師が來た。私は自分の顔が餘り蒼かつたので博士は玆を去れと云つた。私は心殘りながら室を出た。

二十二

私は朝の四時迄知らなかつた。ジウリアノが私に會い度いと云ふので私は急いで産室に行つた。

『ツリオ様。這麼になつて了つて・・・』

私は斯う云ふ妻の暗い曇つた眼を見て次の室へ行つて見ると博士は今がお産だと云つて其の仕度をして居た。機械を見て私は驚いた。

『難産ですか？　大丈夫ですか？』

『否、これは用心の爲めです。大丈夫安産です。貴君がいらつしやると却つていけませんから彼方へ行つていらつしやい。』

私が妻の室へ這入つて行くと妻は突然に私の手を摑へた。私が去らうとすると

『ツリオ様。』

と云ふ聲は丁度既う會へませんと云ふやうに聽こえた。

誰か私を扉の外へ押し出した。私は其の儘足がすくんで歩けず慄えて居た。幾分間・・・中からは獸の呻吟きの様な怖ろしい凄い叫びが聽こえた。しまつた！

ジウリアノは助からぬ！　子供は什うか？　私は思はず扉を開けた。

『いけません。接近ると危險です。』と博士が云ふ

『嬰兒は？』

『次の室です。』

で次の室に行くと腐肉の魂の様な産兒が眼に入つた。

『まあ何て御立派なお子様でせう。』

と頻りと産婆は褒めて居る。而して私に産兒を突きつけた。

私の目は眩むだ。自分の心は死むだものの様に感じた。

『神様のおかげで呼吸がお出來になりました。』

と産婆が云ふ。死を希つた此の子は生きて居るのだ。私の心は云ひえぬ苦痛に震へた。

此の時ジウリアノの聲を聽いて私は狂人のやうになつて産室へ這入つて行つた。

二十三

私は死むだ樣に眠つて居る妻の枕に坐つた。而して其の死人と變らぬ蒼白い顏をつくづく見て居た。最後の呼吸を引きとり相な其の唇。殊に死に面して居ると云ふ感じの故か其の顏が神秘に崇高く見える。私はどの樣な事をしても妻を救はればなぬ、自分の愛で今迄の穢れた罪を洗ひ清めてやらればならぬと思つた。

妻は微に目を開いたが又閉ぢてしまつた。

博士と實母が這入つて來た。而して私の居る事はよくないと注意した。

實母は私の手を把つて産兒の部屋に行つた。

産兒はリボンの布で編むだ頭布を冠つて居る。顏の水脹れは大分失くなつたが、其の頰は傷跡の皮やうに薄くなつて居る。

『此の兒は誰に似て居るんだらう。ジウリアノに似て居る樣だね。』

と實母が云ふ。

『未だ判るものですか。唯醜いばかりですよ。』

私の聲は荒かつた。

『醜い事はないよ。這麼に美しい子は無いよ。』

實母が輕い接吻をするとマリアもナタリアも兄さんも同じ樣に汚れた兒に接吻を與へた、而して私にもと云はれたが、私は此の他人の肉塊に唇を觸れる事は出來ない。

『接吻してやらないの』

『ええ、此の子が這麼にジゥリアノを苦しめたかと思ふと憎い！。』

と云つたが、皆に強ひられて私は苦しい思ひをして酷たらしく唇を觸れた。

餘り亂暴だつたのか、嬰兒は泣き出した。家族は呆然として私の方に眸を集めた。

私は震へながら、

『御母さん赦して。私は思はず酷くしました。』

實母は泣く子を抱き擧げた。

私はジゥリアノの室に兄を誘つた。

二十四

ジゥリアノは數日間生死の界にあつた。私は夜晝絶間なく妻の枕許で根限りの看病を盡した。一齊を此の手で濟ました。藥を飲ませたり、凍えた樣な足を暖めたり震へる動悸を鎭めたりしに。疲れると妻の傍に眠つた。

博士は私の看病が奇跡を奏してジゥリアノの生命を救つたと云つて安心して他の醫者に托して歸つた。

ジゥリアノは涙をこぼして私の親切を喜こんだ。私もホロリとした。

私はそれ以後も決してジゥリアノの室を出なかつた。なるべく二人で話して居るのを好むだが、折々此の靜かな愛に向ふ心を破るものはリボンの美しい帽子を冠つた兒の姿である。お前は何故生きて居る。と叫むでやり度い。嬰兒の姿を見ると私の血は急に凍てしまう、ジゥリアノは何と思ふだらう。

妻が嬰兒の事を心配して問ふのを見ると私は

『お前は既うその樣な事は考へてはいかん。私の爲めに唯全快するのに努めて呉れ。』

『ても貴郎の御心を思ひますと・・・』

『何・・・神様が何事もいいやうにして下さる・・・』

私等は神に訴へた。私は侵略者の彼の兒を呪ひ殺さうと思つた。妻も自分と同じ思ひで神に訴へて居るのであらうか、否々妻に其の樣な罪を犯す事が何で出來得やう。

私は敷布の白さと差別のない妻の手に青々と浮く靜脈を見て居た。

二十五

嬰兒は一日ましに健かに生ひ立つた。私は妻の室に此の不義の紀念の兒を見る度、又實母の愛の腕に抱かれたのを見る度、忘れて居た苦みに剝られて、悶へを繰り返さねばならなかつた。

アベスチ博士の代理はゼムマ國手であつた。ジウリアノはゼムマ國手から大輪の菊花を贈られてそれを細い手に持つて喜こんで居た。其れを見た刹那、又も初めて妻を疑ひかけたあの十一月の頃の事を想ひ浮べた。而して彼の樂し相に歌つて居た歌の事も心に浮むだ。

實母は子供に洗禮を受けるのを樂しむで待つて居る。妻は餘程快い方に向つたが國手の診察では未だ床を隔れるには至らないと云つた。

二十六

私は兄と共にヂオバンニを迎ひに行つた。それは子供の敎父となる事を賴む爲であつた。十一月の末頃の午後、二人は鋤を入れた田野を横切つた。

太陽は次第にゆる〳〵地平線に落ち天には黃金色の雲が低くたたずむで居た。

私は心に重い悲しみを抱いて歩いた。兄は頻りと私の心の中を問ふたが、私は唯ジウリアノの事にかこつけて居た。

私等は間もなく畑に種子を蒔いて居る聖者の様な老人を見た。私は直ぐと

『私は今度の兒の教父を貴君にお願ひしやうと參りましたんです。』

斯う云ふ私の心は悲しかつた。

老人は永い間私の顔を茫然と見て居たが、

『私の様な賤しいものに什うして……』

既う老人の目には涙が溜つて居る。

『唯神様の思召で幸に御成人遊ばしますやうにお祈り申します。』

『何卒何分ともお願ひ致します。』

私等は遠慮する老人に強いても願むで別れを告げた。

二十七

次の日の朝、ジウリアノが病氣の故で洗禮式は質素に行はれた。私だけは死んだやうに床に就いて居る妻の枕許に止つた。

妻が嬰兒の事を聽く度に衰弱がますやうな氣がする。此の頃自分の注意も用ひないやうであるか、又も自殺を覺悟して居るのではあるまいか。吁！　左様迄させるのは誰の罪か？　彼の嬰兒ではないか！　左様思ふと私の手は殺意にブルブルと慄えた。

洗禮式を葬式に代へてやる！私は左様思つてジウリアノが眠つて居るのを幸に外に飛び出た。而して教會堂へ急いだ。

然し私は其の崇嚴な式を苦しい思ひをして見て居たのみで何をなす事も出來な

かつた。

私は無數な予盾と錯誤した感情を抱いてジゥリアノの部屋に逃げ込むだ。

妻は凝乎と眼を開けて居た。が私を見て又目を閉じてしまつた。既う瞼は開かれぬものゝやうに。

二十八

其れから私は犠牲の死を得る事のみを考へて居た。最早全く殺人の計畫である誰が見ても判らぬ樣に殺す法は如何したらいゝか、私が彼の兒を殺しさへしたなら必ず妻は今迄の事を忘れて再び樂しい愛に甦つて呉れるであらうと私は今日しやうか。明日にしやうかとそれのみを思つて日を送つた。

勿論、私は左樣した思ひを家内の前では僞つた。なるべく快活に、殊にジゥリ

アノに對しては總ての心配を忘れ果てた樣に親切を盡した。

嬰兒の乳母と云ふのはアンナと云つて美人に富んだモンテネグロから來て居た其の美しい姿は嚴格に過ぎず優美に流れぬ彫像の樣な女で子供を抱いて居る時などは肅然として其の頰が大理石のやうにかたく冷い。

私は折々嬰兒の眠つて居る無邪氣な顏を覗く事があつたが、其の度に私は强いても心を鬼にして殺して見せると叫ぶのであつた。

二十九

ヂオバンニは敎子の事のみ思つて居た。其の髯の生えた顏をそつと眠つて居る兒の顏につけて接吻などした。夜は窓の處へ來てそつと嬰兒の樣子を見たりするとの事であつた。

私は實母から子供が咳をしたと聽いて心が踊つた。

其の話を聽くと心に怖ろしい考へが浮んだ。而してジウリアノの室に行つた。

『今日は少しは具合がいゝのだらう。』

『ハイ、善い樣で御座います。』

『今度よくなつたら何處へ行かうね。』

『あの・・・・ギラリラに。』

と妻は微笑むだ。

『眞當に行かうね。』

と云ひ乍ら私は妻をそつと床につかせた。

私はジウリアノの室を出て種々な思ひに迷ひ乍ら嬰兒の室に行つた、アンナと實母が居た。

『子供の咳は什うですか？』

と聞いて見た。

『何、既うしなくなつたよ。』

私は健康相にアンナに抱かれて乳を飲むで居る兒を憎々しく視た。外には寒さうな風が吹いて居る。

三十

ゼムマ國手は嬰兒は極めて健全だと云つた吁！天意は私に幸せぬ。私は自ら進むで機會を捕へて斷行せねばならぬ。今夜・・・今夜は必ず決行する。

育兒室に行つて見るとアンナは嚴かに嬰兒を守つて居る。言葉をかけても一言二言より喋舌らうともせぬ。

此の時二人の娘とエヂス夫人とが運動から歸つて來た。而して今夜教會堂で novena のある事や降誕祭の種々の樂しい話を語りあつた。而して二人の娘は嬰兒を奪ひあつて抱いたりした。

アンナは故郷の事など想ひ出したのか娘等の今夜の樣子を話す間涙ぐむで聽いて居た。夕暮は近づいた。私は教會堂に行つて novena の準備を見た。外には身を切る樣な風が吹いて居る。又も不圖怖ろしい心が浮むだ。吁！誰か私の此の心を見拔きはせぬか？

家に歸るとジウリアノが待つて居ると聽いて直ぐジウリアノの部屋に行つた。

『まあ何處へ行つていらつしたの？』

『マリアとナタリアを連れて教會へ。』

妻は何となく涙ぐむで

『私は今夜あの初めてのパチオラの降誕祭を思ひ出しましたの。』

私は憐れに斯う云ふ妻を見たが、今夜のやうな好機會をはづしては斷行の爲る時が無いと思つた。二十分の後に爲ればならぬ。今は嬰兒の傍に誰が居るんだらう。

私は一緒にすべき晩餐を妻に斷つて思ひ切つて外へ飛び出した。私の心は亂れて居る。暫く心を落ちつけてから私は育兒室に這入つて行つた。

間もなく教會堂の笛の調べがして來た。アンナは椅子の側に立つて居る、笛の調べは何となく樂しげに響いて來る。

『嬰兒は睡つて居ますか？』

と聞くとアンナは一寸頷いたのみ。

『睡つて居るなら私が此處に居るから教會へ行つて來るがよからう。』

『はい、それなら一寸失禮致しませうか。』

私は自分で乳母を送り出して而して嬰兒の處に行つた。嬰兒は安らかに愛狂しい顔をして眠つて居る。私の心は一寸憐愍に慄えたが鋭い意志の作用は私に平靜に罪惡を犯させた。

私は踊る胸の邊に嬰兒を抱いた。而して四邊を見廻してからそつと風の吹き入る窓の處に連れて行つた。novena の音樂は流れて來て星は寒さうに瞬いて居る。

幾分間……子供は一寸目を動かしてブルブルと慄えたが忽ちに苦し相に泣き出した。私は非常な恐怖れを感じて嬰兒を搖籃にそつと置いた。而して自分の爲した事を誰か見て居はせぬかと扉を開けて見たが誰も見えぬ。安心して泣き叫ぶ子供を何とかして鎭めやうと嬰兒の傍に坐つた。

犧牲の斷末魔！私は堪え兼ねて外へ飛び出した。が嬰兒の泣く聲も漸々消える

樣になつて行つた。ジウリアノは此の聲を聽いたであらうか？何と思つて居るだらうか？私は急にジウリアノの事が氣になり出した。

アンナの歸つて來た時に私は逃げるやうにジウリアノの室に這入つた。

三十一

私は既う總ての意識を失つて了つた。口を開く事さへ非常に倦い。

『今日は不快で頭が變で仕樣が無い。』

と云つて疲れ果てて私は身を倒した。

『何か、貴郎は私に秘していらつしやる事が御座いますのね。』

『其の樣な事は無いよ。』

『貴郎は折々育兒室にいらつしやいますのね、それは貴郎の御勝手ですわ、ても

今夜は・・・貴郎は何をなさいましたか、私皆存じて居ります。貴郎が彼の兒を御覽になつて何とお思ひ遊ばすか、それを思ひますと・・・貴郎が御自分で御自分を苦しめていらつしやいます・・・・。』

此のジゥリアノの言葉を聽いて私の血は急に冷えた。

此の時、エヂス夫人と娘の二人が這入つて來て賑かに教會の話をし出した。

私は苦しさに遂に自分の部屋に歸つて朝迄疲れて睡つてしまつた。

朝の光を見た時、私の心は稍落ち着いて居た。

兄が這入つて來た何を知らせに來たのであらう？

『お前頭痛がするつて？大變顏色が惡い。ジゥリアノも今朝は床を離れず、御實母さんは嬰兒が咳をするつて心配して居ろし、何故斯う家には病人が絶えないのだらうね。』

『嬰兒が咳をしますつて？それは大變です。私など什うでもいいですが、子供は用心しませんと。』

兄の愁はし氣な樣子を見ると私の心は恐怖と耻とに充ちた。

愈々結果が結果を生むのだ。

三十二

醫者は別に嬰兒は危險の事はないと云つた。

私は失望せざるを得ない。再び彼の行爲を繰り返す勇氣は無い。彼の生はジゥリアノと二人を殺すやうなものだ、私と同じ樣に妻も屹度私が家の相繼者たる此の嬰兒の生を呪つて居るのだ。

次の日嬰兒の咳は稍醫者の心を傷めたらしい。母も悒愁に沈むで居た。

私がジゥリアノの顔を見た時、『餘程惡い』と云つた。二人は暫く默つて居た。

ジゥリアノは何かなおぢ怖れる樣に私を身邊から離さうともせぬ。

『私何だか怖くつて……』

私の耳には何か凶變でも起つて來る樣に總ての物の音にも驚かされた。家の中では彼方此方で鈴が鳴る。

クリスチナが這入つて來た。

『旦那樣、一寸、あの、嬰兒樣がお惡いので』

私は急いで育兒室に行つた。

突然な變化——全く不思議な程の激變である。嬰兒の顔は灰色になつて血の氣がなく、唇の色さへ變つて居る。丁度毒藥に中てられたやうに。

私は目のあたり此犧牲を見て心から救ひ度いと云ふ憐れみが出た。

兄が馬車で醫者を迎ひに行つたと云ふ。唯々私は醫者の來るのを待つた。

兄は喘ぎ乍ら歸つて來た。而して冷くなつた兒を抱きあげた。

ゼヌマ國手も間もなく來た。

『嬰兒を何とかして救つて下さい。』

と實母は狂はしく叫むだ。

嬰兒を裸體にして診て居た醫者は

『ああ、既う什うしやうもありません。全く此の急變には驚きました。』

と云ふばかりであつた。而して何とかして呼吸をかへさうと醫者は種々試みた。

私はジゥリアノに知らせる爲め此の室を出た。

『ツリオ樣、あそこからいらして？』

『左樣。』

『何も皆話して下さいまし』

『既う駄目だ。嬰兒は助からぬ。』

『死ぬんでせうか。』

突然妻は私の首を抱いた。お互の頰は酷く接した。而して二人は底知れぬ深い暗い淵に落ちかかつた。

三十三

夕暮に全く嬰兒は呼吸が絶えた。吁！十時間前迄實母の愛の肱に抱かれて居た薔薇の樣な風情は既う彼れにはなかつた。

實母の悲歎、それは誰よりも甚しかつた。

私は誰の手も借らずに此の手で湯灌をしてやらうと決心した。

其の夜家の中の靜けさは墓場の樣であつた。

搖籃が室の中央に置かれ、蠟燭が四隅に立つてある。片側に兄が、片側にヂオバンニが嚴かに坐して居る。私も其の中に交つて孤獨な思ひをして燃ゆる焰を見て居た。すると私は罪業を告白し度いと云ふ樣な心持が怖しい何物かに誘ひ出されるやうに此の唇に上つた。

『此の嬰兒は誰が殺したのでせう。』

此の私の言葉に兄は非常に驚いたらしく、直ぐ私の殆ど意識を失つた樣な身體は自分の寢室に兄の優しい手に依つて運ばれた。

『大變な熱だ。まあ靜かに寢て居るかいい。』

とそつて親切に床に横たへて吳れた。

私は何を云つたか。私は正氣であらうふか。私の彼の樣な言葉で迷惑するもの

は醫者だ。

醫者は私のした事を悟りはせぬか？

丁度熱にうなされた時の樣に嬰兒の斷末魔の時の光景が目に浮ぶ。怖ろしい姦通の兒の犧牲。實母の歎き・・・。

兒は心配相に私の顏を見て居る。

私は自分の呼吸を怖ろしい氣持で聽いたのであつた。

三十四

次の日―私は身體も精神も極端に力を失つて居たが、什麼にしても嬰兒の葬式には加らうとした。

死兒は既う棺に納められて硝子の蓋がしてあつた。美しい菊の花で一杯になつ

て居た。

フエデリコとヂオバンニとして棺を運ぶ。家族の者が手に手に蠟燭を持つて教會堂の廊下を通つた。

詩篇は誦された。一同は葬祭室に揃つた。

誰も一言も語らない。

棺は靈の最後の休み場に据へられてある。

フデリコが眞先に穹窿に下り、次にヂオバンニが柩を持して續き私もつづいた。

圓天井には三個の洋燈が懸り、オリーブ油の焰がトボトボと燃え、濕ぽい陰鬱な重い空氣に光を投げて居た。

私等は最後に其の蒼い小さい顏を覗いた。白い衣、菊の花、總てが朧に遠さかる樣に見え、あらゆる物を超越した神秘な色が漾つて居る。怖しい玄妙な感じが

迫つた。誰も一語も語らぬ呼吸の絶えた様な沈默が續く。

ヂオバンニは壁龕の扉を開け、棺を其の奥に押しやつた。而して永い間跪いて動かなかつた。

棺が其の中で幽に見えた。柔い洋燈の光が圓い暈を描き、崇嚴な影に頸垂れて居るヂオバンニの白い髮を照らして居る。

犧牲 終

大正三年七月十六日 印刷
大正三年七月二十日 發行

著者證印

不許復製

□注意□

エッセンスセリース
▲編輯事務は青年學藝社宛
▲發賣事務は最寄の書店宛
御照會被下べく候

□ヤンスヂイオ 犧牲 □實價金拾錢 郵稅金二錢

Essence Series.

著者 加藤朝鳥
發行者 福岡新三 東京市神田區淺草町十八番地
印刷者 渡邊八太郎 東京市牛込區榎町七番地
印刷所 日清印刷株式會社 東京市牛込區榎町七番地
發行所 青年學藝社 東京府下田端四百五十七番地 代表者 文學士 藤武利三郎
發賣所 福岡書店 東京市神田區淺草町十八番地 振替口座一九〇四四番

277
520

終